

【 復活のトロパリ 第5調 】

しんじゃよ、ちちとせいしんとともにはじめ  
 信者父聖神共に始

なきことばわがすくいのためえに  
 言吾救爲

どうていちよよりうまれしものをほめうとうて  
 童貞女生者讃歌

おがむべし、かれあまんじてそのみにて  
 拜彼甘其身

じゅうじかにのぼおりしをしのびそのこ  
 十字架上死忍其光

うえいのふくかつにてしせしものを  
 榮復活死者

ふくかつせしめたまあえばなあり。  
 復活給

【 日本の聖使徒ニコライのトロパリ 第4調 】

しととひとしくどうざなるもの、ちゅう  
 使徒等同座者忠

じつにしてしんちなるハリストスのえきしゃ、せい  
 實神智の役者聖

なるしんにえらばれたるふえ、ハリストスのあい  
 神撰笛愛

にみちたるうつわ、わがくにのこう  
 満器我國光

しよ お しゃ、あしとしゅきょうせいニコライ  
 照 者 亜使徒主教聖  
 よ、なんぢのぼくぐんのため、および  
 爾 羊 群 爲 及  
 ぜんせかいのため、いのちをたもうせい  
 全世界 爲 生 命 賜 聖  
 さんしゃにいのりたまえ。  
 三者 祈 給

【 日本の亜使徒ニコライのコンダク 第4調 】

こうえいはちちとこ おとせいしんにき  
 光 榮 父 子 聖 神 歸  
 す、

せいせいしゃあしとせいニコライよ、わが  
 成 聖 者 亜使徒聖 我  
 くになんぢをたびびとおよびいほうじんとうけ  
 國 爾 旅 人 及 異 邦 人 受  
 しに、なんぢははじめわがくににおいておの  
 爾 初 我 國 於 己  
 れをがいらいしゃとしりたれども、ハリストスの  
 外 來 者 知  
 ひかりとあたたかきをながし、なんぢのて  
 光 暖 流 爾 敵

きをぞくしんのことなあし、かれらにか  
 屬神子爲彼等神  
 みのおんちようをあたえ、ハリストスのきょうかいをたて  
 恩寵與與教會建  
 たり、いまこのきょうかいのためにいのり  
 今此教會爲祈  
 たまあえ、けだしわれらそのしよしはなん  
 給あえ蓋我等其諸子爾  
 ぢによぶ、わがよきぼくしゃよ、よろこ  
 呼我善牧者慶  
 べよ。

【 復活のコンダク 第5調 】

いまもいつもよよにい、アミン。  
 今何時世世  
 わがきゆうせいしゅ、ひとをあいするしゅ  
 我救世主一人愛主  
 よ、なんぢはぢごくにくだあり、ぜん  
 爾地獄降全  
 のうしゃとしてそのもんをやぶり、ぞう  
 能者其門壊り造  
 せいしゅとしいて、ししゃをおのれとともに  
 成主死者己借

ふ く か つ せ し め 、 し の は り を く じ き  
復 活 死 刺 折

ア ダ ム を の ろ い よ り と き た ま え り 。 ゆ え に  
詛 釋 給 え り 故

わ れ ら み な よ ぶ 、 し ゅ よ 、 わ れ ら を す く い  
我 等 皆 呼 主 我 等 救

た ま あ え 。  
給

司祭) ( 黙誦：聖なる神、<sup>せい かみ せいじゃ うち いこ</sup>聖者の中に息い、<sup>せいさん こえ もつ かしょう</sup>セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、  
ヘルヴィムより<sup>さんえい</sup>讚榮せられ、<sup>ことごと</sup>悉くの<sup>てんぐん</sup>天軍より<sup>ふくはい</sup>伏拝せられ、<sup>ばんぶつ む ゆう</sup>萬物を無より有と  
なし、<sup>ひと なんぢ ぞう しょう</sup>人を爾の像と肖とに依りて造り、<sup>よ つく なんぢ もるもろ たまもの もつ これ かざ</sup>爾が諸の賜を以て之を飾り、  
<sup>ねが もの ちえ めいご あた つみ おこな もの す</sup>願う者に智慧と明悟とを與え、<sup>そのすくい ため つうかい</sup>罪を行<sup>つ</sup>う者を棄てずして、其救の爲に痛悔  
<sup>た われらいや ふとう なんぢ しょぼく こ とき おい なんぢ せい</sup>を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な  
<sup>さいだん こうえい まえ た なんぢ とうぜん ふくはいさんえい たてまつ た もの</sup>る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拝讚榮を奉るに堪うる者と  
<sup>しゅさい なんぢみづか われらざいにん くち せいさん うた う なんぢ じんじ</sup>なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を  
<sup>もつ われら のぞ われら およ じゆう じゆう つみ ゆる わ たましい からだ</sup>以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と  
<sup>せい われら しょうがいぜんこう もつ なんぢ つと え たま せい</sup>を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる  
<sup>しょうしんぢよ こせい なんぢ よろこび な しょせいじん きとう よ</sup>生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、 )

司祭) <sup>けだしわ かみ なんぢ せい</sup>蓋我が神よ、爾は聖なり、<sup>われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ</sup>我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世  
に、

ア ミ ン。

【 聖三祝文 】

せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い な る  
 聖 なる 神 、 聖 なる 勇 毅 、 聖 なる

じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ め  
 常 生 の 者 我 等 を 憐

よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い  
 聖 なる 神 、 聖 なる 勇 毅 、 聖

な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ  
 常 生 の 者 我 等 を 憐

め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、  
 聖 なる 神 、 聖 なる 勇 毅

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ  
 聖 なる 常 生 の 者 我 等 を 憐

れ め よ 。 こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん  
 れ め よ 。 光 榮 は 父 と 子 聖 神

に き す 、 い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。  
 歸 今 も 何 時 世 世 に 、 ア ミ ン。

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ  
 聖 なる 常 生 の 者 我 等 を 憐

れ め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う  
 れ め よ 。 聖 なる 神 、 聖 なる 勇

き 毅 、 せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を  
 毅 、 聖 なる 常 生 の 者 我 等 を



司祭) ( 黙誦：主しゅの名なに依よりて來きたる者ものは崇あがめ讃ほめらる、へルヴィムぎに座ものする者なんぢよ、爾そのくには其國  
 の光こう榮えいの寶座ほうざに在ありて恒つねに崇あがめ讃ほめらる、今いまも何時いつも世よ世よに、 )

【 プロキメン 提綱 主日第5調 】

司祭) 慎つつしみて聽きくべし、衆しゅうじん人に平へい安あん、

誦經) 爾なんぢの神しんにも、

司祭) 睿えいち智ち、

誦經) プロキメン、主しゅよ、爾なんぢは我われら等たもを保われらち、我われら等まもを護こりて、斯この世よより永えい遠えんに至いたらん、



誦經) 主しゅよ、我われを救すくい給たまえ、蓋けだしぎじん義人たは絶たえたり、



誦經) 主しゅよ、爾なんぢは我われら等たもを保われらち、我われら等まもを護こりて、



【使徒経 215 端 ガラティヤ書 6 章 11 節～18 節】

司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、

誦経) <sup>せいしと</sup> 聖使徒パヴェルがガラティヤ人<sup>じん たつ</sup>に達<sup>しよ</sup>する書<sup>よみ</sup>の讀、

司祭) <sup>つつし</sup> 謹<sup>き</sup>みて聽くべし、

誦経) 兄<sup>けいてい</sup>弟<sup>み</sup>よ、視<sup>わて</sup>よ、我<sup>なんぢら</sup>手<sup>いくばく</sup>づから爾<sup>おお</sup>等<sup>しよ</sup>に幾<sup>にく</sup>許<sup>もつ</sup>か多<sup>ほこ</sup>く書<sup>ほつ</sup>したるを。肉<sup>もの</sup>を以<sup>ほつ</sup>て誇<sup>もの</sup>らんと欲<sup>ほつ</sup>する者  
が、爾<sup>なんぢら</sup>等<sup>し</sup>を強<sup>かつれい</sup>いて割<sup>う</sup>禮<sup>う</sup>を受けしむるは、唯<sup>ただ</sup>ハリストス<sup>じゅうじか</sup>の十<sup>ゆえ</sup>字<sup>よ</sup>架<sup>きんちく</sup>の故<sup>う</sup>に由<sup>う</sup>りて窘<sup>う</sup>逐<sup>う</sup>を受け  
ざらん爲<sup>ため</sup>のみ。蓋<sup>けだし</sup>割<sup>かつれい</sup>禮<sup>う</sup>を受<sup>もの</sup>くる者<sup>おのれ</sup>は、己<sup>りつぼう</sup>も律<sup>まも</sup>法<sup>しか</sup>を守<sup>なんぢら</sup>らず、然<sup>かつれい</sup>るに爾<sup>う</sup>等<sup>う</sup>に割<sup>う</sup>禮<sup>う</sup>を受<sup>う</sup>  
けしめんことを欲<sup>ほつ</sup>するは、爾<sup>なんぢら</sup>等<sup>にく</sup>の肉<sup>もつ</sup>を以<sup>ほこ</sup>て誇<sup>ため</sup>らん爲<sup>われ</sup>なり。我<sup>あ</sup>に在<sup>われら</sup>りては、我<sup>しゅ</sup>等<sup>しゅ</sup>の主<sup>しゅ</sup>イイ  
ス・ハリストス<sup>じゅうじか</sup>の十<sup>ほか</sup>字<sup>ほこ</sup>架<sup>ところ</sup>の外<sup>これ</sup>に誇<sup>よ</sup>る所<sup>よ</sup>なし、此<sup>われら</sup>に由<sup>ため</sup>りて世<sup>てい</sup>は我<sup>てい</sup>等<sup>てい</sup>の爲<sup>てい</sup>に釘<sup>てい</sup>せられたり、  
我<sup>われ</sup>世<sup>よ</sup>に於<sup>おい</sup>ても亦<sup>また</sup>然<sup>しか</sup>り。蓋<sup>けだし</sup>ハリストス<sup>あ</sup>・イイス<sup>かつれい</sup>スに在<sup>う</sup>りては、割<sup>かつれい</sup>禮<sup>う</sup>を受<sup>う</sup>くるも、割<sup>う</sup>禮<sup>う</sup>を受け  
ざるも益<sup>えき</sup>なく、惟<sup>ただ</sup>新<sup>ただ</sup>なる受<sup>じゅぞうぶつ</sup>造<sup>えき</sup>物<sup>えき</sup>は益<sup>およ</sup>あり。凡<sup>こ</sup>そ此<sup>のり</sup>の規<sup>したが</sup>に遵<sup>おこな</sup>いて行<sup>もの</sup>う者<sup>ねが</sup>は、願<sup>ねが</sup>わく  
は平<sup>へい</sup>安<sup>あん</sup>と慈<sup>じ</sup>憐<sup>れん</sup>とを蒙<sup>こうむ</sup>らん、神<sup>かみ</sup>のイズライリ<sup>また</sup>も亦<sup>いま</sup>然<sup>のち</sup>り。今<sup>のち</sup>より後<sup>とわれ</sup>人<sup>わづらわ</sup>我<sup>なか</sup>を擾<sup>な</sup>す勿<sup>な</sup>れ、  
蓋<sup>けだし</sup>我<sup>われ</sup>は主<sup>しゅ</sup>イイス<sup>きず</sup>スの瘡<sup>わ</sup>痕<sup>み</sup>を我<sup>お</sup>が身<sup>お</sup>に負<sup>けいてい</sup>えり。兄<sup>ねが</sup>弟<sup>われら</sup>よ、願<sup>しゅ</sup>わくは我<sup>しゅ</sup>等<sup>しゅ</sup>の主<sup>しゅ</sup>イイス<sup>しゅ</sup>ス・ハリス  
トス<sup>おんちよう</sup>の恩<sup>なんぢら</sup>寵<sup>しん</sup>は爾<sup>とも</sup>等<sup>あ</sup>の神<sup>あ</sup>と偕<sup>あ</sup>に在<sup>あ</sup>らんことを、アミン。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) 兄弟たちよ。ごらんなさい。わたし自身いま筆をとって、こんなに大きい字で、あなたがたに書いていることを。いったい、肉において見えを飾ろうとする者たちは、キリスト・イエスの十字架のゆえに、迫害を受けたくないばかりに、あなたがたにしいて割礼を受けさせようとする。事実、割礼のあるもの自身が律法を守らず、ただ、あなたがたの肉について誇りたいために、割礼を受けさせようとしているのである。しかし、わたし自身には、わたしたちの主イエス・キリストの十字架以外に、誇とするものは、断じてあってはならない。この十字架につけられて、この世はわたしに対して死に、わたしもこの世に対して死んでしまったのである。割礼のあるなしは問題ではなく、ただ、新しく造られることこそ、重要なのである。この法則に従って進む人々の上に、平和とあわれみとがあるように。また、神のイスラエルの上にあるように。だれも今後は、わたしに煩いをかけないでほしい。わたしは、イエスの焼き印を身に帯びているのだから。兄弟たちよ。わたしたちの主イエス・キリストの恵みが、あなたがたの霊と共にあるように、アアメン。

\*\*\*\*\*

司祭) <sup>なんぢ へいあん</sup> 爾に平安、

誦經) <sup>なんぢ しん</sup> 爾の神にも、ア ril イヤ、

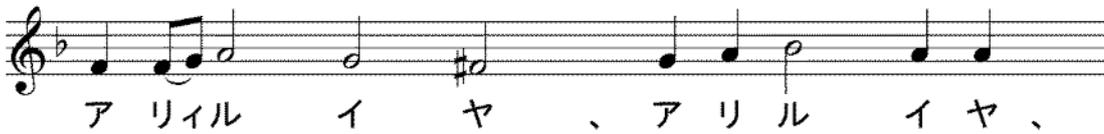
【 ア ril イヤ 主日第5調 】

司祭) <sup>なんぢ へいあん</sup> 爾に平安、

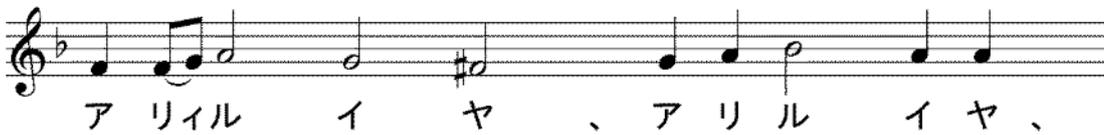
誦經) <sup>なんぢ しん</sup> 爾の神にも、

司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、

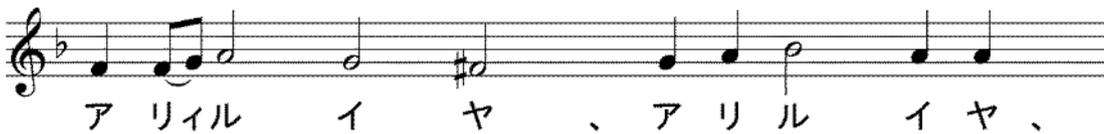
誦經) ア ril イヤ、



誦經) <sup>しゅ われなが なんぢ じれん うた わ くち もつ よよ なんぢ しんじつ つた</sup> 主よ、我永く爾の慈憐を歌い、我が口を以て世に爾の眞實を傳えん、



誦經) <sup>けだしわれい じれん なが た なんぢ なんぢ しんじつ てん かた</sup> 蓋我言、慈慈は永く建てられたり、爾は爾の眞實を天に固めたり、



司祭) ( 黙誦: <sup>ひと あい しゅさい わ ころろ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ しねん</sup> 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の浄き光を輝かし、我が思念

<sup>め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ</sup> の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠を

おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ ところ  
畏るる 畏 をも入れて、我等が 悉 くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所

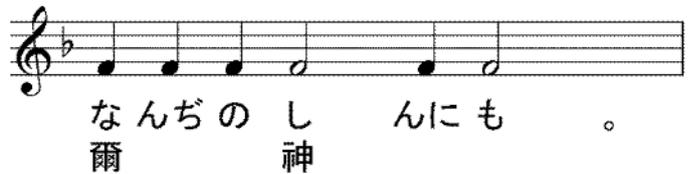
おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ  
を思い且つ行いて、属神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋 ハリストス神よ、

なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ わげん ちち しせいしぜん  
爾は我が 靈 と體 との光 照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし

いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ  
て生命を 施す 爾の神とに光 榮を獻ず、今も何時も世世に、アミン。 )

エヴァンゲリオン  
【 福音經 ルカ福音書 83 端 16 章 19～31 節 】

司祭) えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん  
睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



司祭) でん せいふくいんけい よみ  
ルカ傳の聖福音經の讀、



司祭) つつし き しゅ さ たとえ もう い と ひと むらさきのうわぎ ほそきぬの  
謹みて聴くべし、主は左の譬を設けて曰えり、富める人あり、紫袍と細布と

き ひびおご たのし またまづ もの な ぜんしんしゅもつ や と ひと  
を衣、日日奢り樂めり。亦貧しき者ラザリと名づくるあり、全身腫物を病みて、富める人

もん ふ そのしょくたく お くづ もつ はら み ほつ いぬ きた そのしゅ  
の門に臥し、其食卓より遺つる屑を以て、腹を果たさんと欲せり、犬も來りて、其腫

もつ ねぶ まづ ものし てんしら よ ふところ おく と もの し  
物を舐れり。貧しき者死して、天使等に因りてアヴラアムの懷に送られ、富める者も死

ほうむ ちごく くるしみ うち あ かれそのめ あ はるか およ その  
して葬られたり。地獄の苦の中に在りて、彼其目を擧げて、遙にアヴラアム及び其

ふところ あ み すなわちよ い ちち われ あわれ つかわ  
懷に在るラザリを見たり。乃呼びて曰えり、父アヴラアムよ、我を憐み、ラザリを遣

そのゆび さき みづ ひた わ した ひや けだしわれこ ほのお うち くるし しか  
して、其指の尖を水に蘸して、我が舌を涼さしめよ、蓋我此の燄の中に苦む。然

れどもアヴラアム曰えり、子よ、爾は存命の時爾の善を受け、ラザリは同じく其惡を

う おも いまかれ ここ なぐさ なんぢ くるし ただこれ なんぢら われら  
受けたりしを憶え、今彼は此に慰み、爾は苦む。第此のみならず、爾等と我等と

あいだ おおい ふち かぎ ゆえ ここ なんぢら わた ほつ もの あた かれ  
の間に巨なる淵は限り、故に此より爾等に涉らんと欲する者は能わず、彼より

われら わた え かわい しか ちち こ わ ちち いえ つかわ けだしわれ  
 も我等に 渉るを得ず。彼曰えり、然らば父よ、請う、ラザリを我が父の家に 遣 せ、蓋 我  
 にごん ぎょうだい かわい そのまえ しょう な かわら こ くるしみ ところ きた  
 に五人の 兄 弟あり、彼をして其 前に 證 を爲さしめよ、彼等も此の 苦 の 處 に來ら  
 ざらん爲なり。アヴラアム之に謂う、彼等にモイセイ 及び預言 者あり、之に聽くべし。彼曰  
 えり、否、父アヴラアムよ、然れども若し死の中より彼等に往く者 あれば、彼等悔 改せん。  
 アヴラアム曰えり、若しモイセイ 及び預言 者に聽かずば、縦い死より復 活する者ありとも信  
 ぜざらん。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) ある金持がいた。彼は紫の衣や細布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮していた。ところが、ラザロという貧乏人が全身でき物でおおわれて、この金持の玄関の前にすわり、その食卓から落ちるもので飢えをしのごうと望んでいた。その上、犬がきて彼のでき物をなめていた。この貧乏人がついに死に、御使たちに連れられてアブラハムのふところに送られた。金持も死んで葬られた。そして黄泉にいて苦しみながら、目をあげると、アブラハムとそのふところにいるラザロとが、はるかに見えた。そこで声をあげて言った、『父、アブラハムよ、わたしをあわれんでください。ラザロをおつかわしになって、その指先を水でぬらし、わたしの舌を冷やさせてください。わたしはこの火炎の中で苦しみもだえています』。アブラハムが言った、『子よ、思い出すがよい。あなたは生前よいものを受け、ラザロの方は悪いものを受けた。しかし今ここでは、彼は慰められ、あなたは苦しみもだえている。そればかりか、わたしたちとあなたがたの間には大きな淵がおいてあって、こちらからあなたがたの方へ渡ろうと思ってもできないし、そちらからわたしたちの方へ越えて来ることもできない』。そこで金持が言った、『父よ、ではお願いします。わたしの父の家へラザロをつかわしてください。わたしに五人の兄弟がいますので、こんな苦しい所へ来ることはないように、彼らに警告していただきたいのです』。アブラハムは言った、『彼らにはモーセと預言者とがある。それに聞くがよからう』。金持が言った、『いえいえ、父アブラハムよ、もし死人の中からだれかが兄弟たちのところへ行ってくれましたら、彼らは悔い改めるでしょう』。アブラハムは言った、『もし彼らがモーセと預言者とに耳を傾けないなら、死人の中からよみがえってくる者があっても、彼らはその勧めを聞き入れはしないであろう』。

\*\*\*\*\*

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい  
 主 光 榮 爾 歸 、 光 榮  
 はなんぢにきす。  
 爾 歸

※聖体礼儀3 (金口イオアン) へ